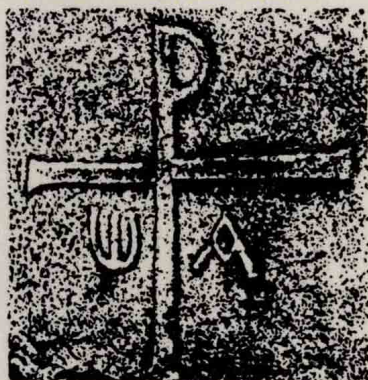


カトリック教会の道德

アウグスチヌス 熊谷賢二訳

キリスト教古典叢書 2



上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

カトリック教会の道德

アウグスチヌス

熊谷賢二訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

カトリック教会の道徳〔キリスト教古典叢書2〕

1963年10月31日 第1刷発行

ISBN4-423-39202-X

1993年4月20日 第4刷発行

編 集 者 上智大学神学部

編集責任者 P・ネメシェギ

訳 者 熊 谷 賢 二

発 行 者 久 保 井 浩 俊

定価 2266 円 (本体 2200円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

緒言

われわれはすでにこの翻訳集の第一巻で、アウグスチヌスの親友ボシディウスによって書かれたアウグスチヌスの伝記を公にしたので、ここでふたたびアウグスチヌスについて詳細に記述する必要はないと思う。それで今は、ただかれの生涯がいののおもな事跡について簡単に触れておくだけとしよう。アウグスチヌスは、三五四四年、アフリカのタガステに生まれた。三七〇年から三七四年の間、若い大学生としてカルタゴで学業に励んだが、そのときマニ教に陥り、三八三年にいたるまでの九年間というもの、このマニ教を信奉していた。しかしかれは哲学上の研鑽けんの結果、漸次この教派の誤謬びやうを悟りはじめ、ミラノで聖アンブロジウスの説教を聞いているうちに、カトリック教会の宣言している信仰についてのかれの最後の疑いも解け、自身「告白録」の中に述べているとおり、神の恩恵に打たれて洗礼を求め、三八七年の復活祭の前夜、アンブロジウスから洗礼を受けた。三九二年司祭に、三九六年司教に叙階され、ヒッポの司教として、ローマ帝国の西域におけるカトリック教会の主要な代表人物となった。無数の労苦と膨大な著作活動の後、四三〇年、ヒッポで生

涯を閉じた。

アウグスチヌスは、もっとも偉大なキリスト教哲学者のひとりであり、もっともすぐれた神学者のひとりであった。中世ヨーロッパのキリスト教文化の形成者のひとりであり、さらに今日においても、その著作はほとんどすべての現代語に翻訳され、それによって人の精神に絶えず大きな影響を及ぼし続けている。実にアウグスチヌスは今もなお絶えず生き続けており、かれの著作は人々を自分の生活のもっとも重大な問題の解決にとり組ませ、人間としての生活の根本的態度について決定を促がす不思議な力を持っているのである。

ここにわれわれがはじめて邦訳を出すアウグスチヌスの著作は、かれの改心後まもなく、すなわち、三八八年、アウグスチヌスが母のモニカや友人といっしょにミラノからローマにもどり、アフリカに帰る準備を整えていたときに書かれたものである。そのときかれはこのローマで、マニ教徒の活発な宣伝活動を見聞した。それでアウグスチヌスはこのマニ教について、その「諸本の改訂」(Liber Retractorum)の第七章において次のように述べている、「わたしはすでに洗礼を受けてからローマに逗留していたとき、マニ教徒の虚偽とごまかしの禁欲と節制についての自画自賛を黙過することはできなかった。か

れらは眞のキリスト教徒とは比較もできないのに、それらの禁欲をもって單純な人々を欺こうとし、眞のキリスト教徒よりもみずからをすぐれたものとしていた。それでわたしは二冊の本、すなわち、『カトリック教会の道德』(De Moribus Ecclesiae)と題する一冊の本と、『マニ教徒の道德』(De Moribus Manichaeorum)と題する一冊の本とを著わした」と。かれははじめの本の中で、愛徳がキリスト教的徳行の土台であることを証明し、カトリック教会の中でその愛がどのように実践されているかを示した。第二の本の中では、自分自身の経験から熟知していたマニ教徒の惡徳を暴露し、非難した。今からみるとマニ教はすでに大昔の時代に姿を消してしまつたものであるから、この第二の本は現代に生きるわれわれにとってあまり興味深い本ではない。それでわれわれはこの本を割愛して、キリスト教的徳行を積極的に記述している第一の本だけを翻訳した。しかしこの第一の本の中でもアウグスチヌスはたびたびマニ教徒について述べているので、ここで、その教派についての理解を深めるために、少しばかりそれについての説明をつけ加えておくことにした。

マニ教の創始者であるマニは、紀元二一六年、ペルシャ人を両親としてバビロニアで生まれた。かれは自分の始めた新しい宗教をオリエント全域にわたって活発にひろめ、イン

ドまでも旅した。かれはこうした活動のためにペルシア王に捕えられて投獄され、二七七年殺害された。マニの教えた宗教は混交宗教で、キリスト教の要素も多くとり入れていた。マニは、自分がイエズス・キリストによって約束された聖霊であると説いた。しかしマニの宗教の根本的な思想となるものはキリスト教よりもむしろ、ペルシアのゾロアステルの教え、すなわち二元論である。かれの説くところによると、絶対永遠の善の第一原理と、これも絶対永遠である悪の第一原理があり、これら二つの原理は互いに永遠に抗争し続けしており、魂は善の原理にあずかり、物質は悪の原理にあずかる。マニ教徒は他の多くのグノーシス派の教派と同じく、旧約聖書を聖書と認めず、新約聖書のみを認めた。かれらによると、旧約に述べられている神はイエズス・キリストの御父なる神とは異なるのである。しかし新約の中には旧約を認証している箇所が多くあるので、マニ教徒たちはそれらの箇所が、後に新約に挿入^{まぎ}された偽造箇所であるといわざるをえなくなった。アウグスチヌスはこの本の中で、特にマニ教徒のこの誤謬を攻撃し、旧約も新約も同じ神をのべ伝え、同じ道徳的な教えを説きすすめていることを美しく証明している。

本書の構造

序文において、アウグスチヌスはこの本の目的を説明する。かれはカトリックの信仰の教えに従って、徳行について取り扱おうとしているのである(一—二)。この場合、二つの扱い方が考えられる、すなわち、その一つは「理拠による」方法、すなわち哲学的な考察による方法であり、他の一つは「権威による」方法、すなわち聖書に蔵せられた神の啓示による方法である。アウグスチヌスはこのような問題を取り扱う場合には、「権威による」証明が先行すべきであると考え、すなわち、人は神の啓示によって教えられ、信仰によってその啓示を信じてはじめて、自分の理性を正しく使用しながら、徳行の問題について誤ることなく論じることができると考える。アウグスチヌスは他の著作の中でも、「まず信じなければ、理解できないであろう」(*Nisi credideris, non intelliges*) (イザヤ七の九)という聖書の古いラテン訳のことを、特に好んで引用している。それは、神のみことばに服従する信仰は、「理解」への第一歩である、という意味である。

しかしアウグスチヌスは本書の中では、いつもまず「理論的根拠」を求めたマニ教徒のやり方に応じて、人間の正しい生き方とはなんであるかを、まず「理拠によって」証明し、次に同じことを聖書から説明することに決定する(三)。

アウグスチヌスは人間の正しい生き方についての哲学的な探究を、まず人間の真の幸福

がどこにあるかを探究することから始める(四)。そして、人間の幸福は最高善を所有することにしかないことを示す(五)。

それから、人の最高善がなんであるかを探究する(六)。その第一段階として、まず、人間の肉体の最高善が人間の魂であることを証明する(七—八)。それから、人間の魂の最高善が神であることを示す(九—一〇)。

人間はこれまでは理拠の導きによって知りうるが、これからさらに神の名状しがたい英知をきわめることはできない。したがって、人間がいかに正しく生きるべきであるかを神ご自身から教わるには、「われわれは、われわれの小さな推理力を神のみことばに従わせ」なければならぬのである(一一—一二)。

それから、この本の第二の部分が始まる。ここでアウグスチヌスは聖書のことばを引用して、人がいかに生きべきかを説明する。まず最初に、「心をつくし、靈魂をつくし、精神をつくして主なる神を愛せよ」(マタイ二二の三七)というイエズスのことばを引用する。したがって人間は、愛をもって自分の最高善である神にかなければならないのである。このおきては、キリスト教的道德のすべてを包含している(一三)。アウグスチヌスはその次にこのおきてが旧約にもあったことを示したあとで(一四—一七)、キリスト教的愛の説

明に論をすすめる。人は愛することによって神に従う、そして神のみそばにはべるものとなるとき、完全に幸福なものとなり、何もものかれを神から引き離すことはできなくなる（二八―二九）。神人イエズス・キリストは御みずから「徳」であり、「知恵」であり（一コリント一の二三―二四）、「真理」である（ヨハネ一四の六）。神を愛するということは、「徳」を愛することであり、「知恵」を愛することであり、「真理」を愛することである（二二）。人は聖霊から与えられた愛をもって父と子と聖霊なる神を愛することにより、善良に生き、正しく生き、幸福にも生きる。われわれは愛をもって神につくのであり、神につくことは人にとってもっともよいことである（二三―二四）。

次いでアウグスチヌスは、キリスト教的生括において実践すべき徳について一つずつ論じていく。この際アウグスチヌスは自分の論題として、ギリシヤ哲学の古典的な形式に従い、四つの枢要徳、すなわち、節制、剛毅、正義、賢慮の四つの徳をとりあげるが、それをキリスト教的内容をもって満たす。これらの四つの徳は、アウグスチヌスにとって、完全な愛を助成するものであり、擁護するものである（二五）。次ぎにアウグスチヌスはふたたび新旧両約のことばを引用しながら、両約にしたがうと、徳のつとめは神の愛をはばむあらゆる妨げを取り除くことにあることを示し、さらにマニ教徒に向かい、知恵と真理を真

剣に追求するように勧告する(二六—三四)。それからアウグスチヌスは枢要徳について一つずつ美しく論じていく。節制については、人に聖書の教えに従って世のむなしきものや虚栄を蔑視せしめるものであることを論じ(三五—三九)、剛毅については、聖書の中に語られている聖なる人々の模範が示すとおり、人を神から引き離そうとするすべてのものを征服させるものであることを論じ(四〇—四三)、正義については、聖書の教えるのとおり、われわれにまず第一に神に帰すべき礼拝を要求するものであることを論じ(四四)、賢慮については、他の徳を保持する上に必要不可欠なものであることを論じている(四五)。アウグスチヌスはこれら四つの徳についての説明を、ふたたび愛のおきてにもどることによってしめくくる。これら四つの徳に守られた愛は、人を永遠の生命に導くものである(四六—四七)。

これまでアウグスチヌスは、ただ神への愛についてだけ論じてきた。それで、「神以外のものは愛さなくてもよいのか」という疑問が起こってくる。それに対してアウグスチヌスは「もちろん愛さなければならぬ」と答える。事実、「人の人に対する愛よりも、神の愛に導くより確かな階段というものは何も」存在しないのである(四八)。それでアウグスチヌスは「隣人を自分と同じように愛せよ」(マタイ二二の三九)というイエズスのことば

を引用したあとで、隣人に対する愛徳を実践するためのいろいろな方法を非常に美しく説明する(四九―五一)。物質的に隣人を助ける方法を論じ(五二―五四)、さらにその魂を助ける方法について論じる(五五―五六)。それから、すでに旧約が隣人愛を知っていたことを示してこの論題を結び、両約に含まれた愛徳のおきてから、聖書全体の權威をみごとに証明する(五七―六一)。

この本の最後の部分において、アウグスチヌスは徳行について、カトリック教会の中で教えられ、かつ実践されていることを具体的に描写する(六二―六四)。隠者たち(六五―六六)、修道士たち(六七―六八)、聖職者たちやその他の人々のもっとも聖なる生活の範例を持ち出し、かれらの生活において真摯な愛がどのように実践されているかを示す(六九―七三)。それからアウグスチヌスはマニ教徒の偽善と嚴格主義を非難し、それにカトリック教会の示す真摯な態度と健全な節度とを対立させ、教会が、人には最高の完徳の道を示すが、人々には無理な要求をしないことを示してこの本を閉じる(七四―八〇)。

聖アウグスチヌスのこの短い作品を読むだけで、アウグスチヌスが「愛の教師」と呼ばれていることがいかに正当なことであるかがわかる。事実アウグスチヌスはいつも神と隣

人に対する真摯な愛を人々の心の中にはぐくむことにもっとも意を注いでいたのである。アウグスチヌスは話したり書いたりするとき、理論的な体系を組み立てようとは決して思わなかった。かれの望んだただ一つのこととは、神がどれほど人を愛しておられるかということの人々に示し、神にこの愛を返すよう人々を導くということであった。あるひとりの友人に、『教えの手ほどき』(De Catechizandis Rudibus)について忠告を与えながら、アウグスチヌス自身いつか次のように書いたことがある、「あなたは、この愛を自分の目的とし、あなたの話すすべてのことをこの愛に向けなさい。あなたは話すときにはいつも、相手が聞いて信じ、信じて希望し、希望して愛するようになるよう話さなければなりません」(上智大学神学部編、キリスト教古典叢書四卷三五頁)と。実にアウグスチヌスは全生涯にわたり、たえずこのことのみを自分の終極目的としていたのである。

このまことの愛は、アウグスチヌスによると、神御みずから人間に与えられたたまものである。「神に導く神への愛は、神なる御父が、イエズス・キリストを通して聖霊とともに与えられるものである」(Contra Iulianum 4, 3, 33)。「神の愛がわれわれの心に注ぎ込まれたといわれているのは、神がその愛によってわれわれを愛しておられることを意味して

いるのではなく、その愛によりわれわれをしてご自分を愛するものとされたことを意味し
 へる」(De Spir. et Lit. 32, 56)。

この神のたまものは、あらゆるものの中でもっとも高価なものである。「この神のたま
 ものよりすぐれているものは何もない。永遠の王国の子と永遠の地獄の子をわかつのは、
 この愛だけである。……信仰は愛がなくても存在しうるが、それはなんの役にもたたない
 ものである」(De Trin. 15, 31)。愛は「高価な真珠」であり、人はそれをうるためには、
 自分の所有するすべてのものだけでなく、自分自身をも売り払わねばならないのである。
 愛は、人を天国に運ぶ船である。神と隣人に対する二つの愛のおきては、人を神のもとま
 で上げる二つの翼である。愛は、人を勇気づけてすべてのおきてを守りやすくするパンで
 ある。愛は、あらゆる善業を萌えださせるよき根である。愛は、キリストの弟子を他より
 わかつ唯一のしるしである。『神の子らと悪魔の子らとの区別はこれによって明らかであ
 る。すなわち、すべて義を行なわない人は神よりの者ではない。兄弟を愛さない人もそう
 である』(二ヨハネ三の一〇)と。だから、愛のみが神の子らと悪魔の子らとを区別するの
 である。すべての者が十字を自分にしるそうとも、すべての者がアーメンと答えようとも、
 すべての者がアレルヤを歌おうとも、すべての者が洗礼を授かり、聖堂にはいり、バシリ

カの壁を造ろうとも、愛によらなければ、神の子らは悪魔の子らから区別されはしないのである。愛を持つ者は神によって生まれた者であり、愛を持たぬ者は神によって生まれなかった者である。偉大なしるし、大いなる区別。あなたはたとえ欲するものごとく持っているとしても、もしこの一つのものを持たないなら、それらのものからなんの利益も受けないのである。反対に、たとえ他のものを持たなくとも、もしこの一つのものさえ持っているならば、律法を全うするのである」(In Epist. Joannis 5, 7)。「神は愛である」から、愛を持つ者は神を持つのである。「愛を持っている人に神を見させるには、その人を遠くに送る必要はない。かれは自分の良心を注視しただけで、そこに神を見いだすことができるのである。もしそこに愛が宿っていないならば、神もそこには宿っておられない。それに反して、もしそこに愛が宿っているならば、神もそこに宿っておられる。天国に座したもう神を見たいと望むのか。それならば愛を持つようにせよ。そうすれば神は天国に座しておられるのと同様に、その人のうちに宿られるのである」(Enarratio in Psalmum 149, 4)。したがって神と隣人に対する真の愛は、ある意味で、キリスト教の唯一のおきてであり、他のおきてはみな、この一つのおきてのうちに包含されるものである。このためにこそアウグスチヌスは、「ごく短いおきてがあなたに与えられている、『愛せよ、そし

て望みのままにふるまえ』(In Epist. Joannis 7, 8) と言いたのである。

われわれは、アウグスチヌスのもとでは愛についてまだ多くのことを論じることができるのであるが、以上でじゅうぶんでしょう。しかしアウグスチヌスの著作の中にあらわれることで、現代の読者にとっては不可思議とも思える一つのことについて述べておこう。

多くの現代人はカント以後、幸福の望みと道徳的な行為とを区別することに慣れており、道徳的によい行為とは、幸福のことを考えずに「定言的至上命令」に従って行なった行為であると考えている。このような区別は、古代哲学には全然知られていなかったことであり、アウグスチヌスもこの例にもれなかったのである。アウグスチヌスにとっては、最高善である神を愛することは道徳の本質であるが、神は人の最高善であるからこそ、神に付着することは、同時に人の最高の幸福でもあるのである。アウグスチヌスも神を「無償で愛さ」なければならぬことを強く主張しているが、それを次のように説いている、「神から神以外の何ものかを求めようとしてはならない。無償で愛せよ、かれからかれの^のみを期待せよ」(Sermo 331)と。さらに他の箇所では、「愛するならば、無償で愛せよ。もし真に愛するならば、神のみを自分の欲する報いとして愛せよ」(Sermo 165)と。人のまことの幸福と人の道徳的な正しさとを分離しようということは、アウグスチヌスにとっては

まったく考えられないことであった。神は善そのものであり、真理そのものであり、正義そのものであり、さらに人の最高善そのものである。人はもし、正義・真理・善を愛するならば、そのこと自体によって、すでに自分の最高善・最高の幸福をも愛しているのである。が、自分の幸福を愛するのは、もちろん神を自分の個人的な幸福の具にしようという利己的な望みからではなく、客観的に「神につくことが」人間の最高の義であると同時に、最高の幸福でもあるからである。アウグスチヌスは神への愛から独立したある自立的な道德というものを、けっして認めることはできなかった。かれは、愛の対象に一致することを望まない愛を、真の愛と思うことはできなかったのである。アウグスチヌスのこの道德観はカントのそれに劣らないどころか、アウグスチヌスのほうが、道德の問題をカントよりも深く洞察していたとわたしは思う。

われわれは本書の翻訳のために、十七世紀聖マウルス修道団体のベネディクト会士たちによって著わされた校訂本を使った。この本は完全なものではないが、今日までに著わされた校訂本のうちでもっとも正確なものである。それは *Migne の Patrologia Latina* である。Vol. 32, p.1309-1378 に載せられている。

昭和三十八年八月十五日

編集責任者

P・ネメシエギ